

平成29年度第1回丹波市総合教育会議 会議録

平成29年5月17日（水）午後3時～

丹波市教育委員会

| | | |
|-----|---------------|-------|
| 出席者 | 市長 | 谷口 進一 |
| | 副市長 | 鬼頭 哲也 |
| | 教育長 | 岸田 隆博 |
| | 教育長職務代理者 | 深田 俊郎 |
| | 教育委員 | 荻野 確郎 |
| | 教育委員 | 中村 美穂 |
| | 教育委員 | 上田 真弓 |
| | 企画総務部長 | 村上 佳邦 |
| | 総務課長 | 柿原 孝康 |
| | 教育部長 | 細見 正敏 |
| | 教育部次長兼学校教育課長 | 西田 隆之 |
| | 教育総務課長 | 岡本 晃三 |
| | 学校教育課副課長 | 足立 和宏 |
| | 教育総務課副課長兼庶務係長 | 荻野 昭久 |

○村上部長 丹波市の総合教育会議を始めさせていただきたいと思います。

開会に当たりまして、市長のほうから自己紹介を兼ねまして御挨拶をいただけたらと思います。よろしくお願いいたします。

○谷口市長 皆さん、こんにちは。御苦労さまでございます。

総合教育会議、私もつい先日まで存在をよく知りませんでした、よく中身を調べてみるに、大変な会議やなど、大変に重要な会議やなどというのがわかってまいりました。本日は私の主な施政方針みたいなことにつきまして皆様方に御意見いただいて、それに対して私も意見交換をさせていただくということで進めさせていただきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

○村上部長 ありがとうございます。

それでは、本日の会議のほうはお手元の次第によって進めさせていただきたいと思います。既に市長のほうから自己紹介ございましたけれども、教育委員さんのほうから順次自己紹介のほうよろしくお願いいたします。岸田教育長、よろしくお願いいたします。

○岸田教育長 教育長の岸田です。よろしくお願いいたします。

○荻野教育委員 教育委員の荻野確郎といたします。どうぞよろしくお願いいたします。

○上田教育委員 教育委員の上田です。よろしくお願いいたします。

○深田教育長職務代理者 教育委員の深田でございます。現在、教育長職務代理者となっております。よろしくお願いいたします。

○中村教育委員 教育委員の中村美穂と申します。小学校6年生と高校1年生と高校3年生の息子の母親でございます。よろしくお願いいたします。

○村上部長 ありがとうございます。

本日、鬼頭副市長も同席をいただいております。

○鬼頭副市長 副市長、鬼頭でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

○村上部長 それでは、早速ではございますが、ただいまから、3番目の市政の課題についてということで、30分間、市長のほうからお話をいただきたいと思います。

あらかじめ本総合教育会議につきましては、設置要項等を見ていただいて

るところと思います。市長と教育委員会が円滑に意思疎通を図り、本市教育の課題及び目指す姿等を共有しながら、同じ方向性のもと連携して効果的に教育行政を推進していくために、地方教育行政の組織及び運営に関する法律に基づきましてこの丹波市総合教育会議を設置するものでございます。

それでは、早速ではございますが、市長のほうから市政の課題についてということで約30分間お話をいただきたいと思います。よろしく願いいたします。

○谷口市長　それでは、まず私ね、総合教育会議といいますと、そもそも何が発端でこれ始まったのかというようなところを見てみると、例のあの6年前の大津のいじめ事件とかいうところからどうも来てるんやというのが、それに関して、やっぱり教育、いじめ事件、いじめ事案なんかを中心にね、いろいろ話しするのかなと思ってたんですけど、そういったことよりも、私が昨年12月5日に就任してからどういう気持ちで、教育も含めてね、市政運営をこの4年間担わせていただこうかということのをきっちり御説明するほうが意味があるなと思ひまして、そちらの御説明にさせていただきます。

お手元に9枚ものの資料をお渡ししていると思いますが、後に1枚ちょっとこの北近畿経済新聞の資料をおつけしております。

1ページ目に、ちょっと手書きで書きましたけど、こういう手順に従ってちょっとお時間を拝借したいと思います。1ページ目から、右下に番号打っておりますけど、基本的に資料はできるだけ、自分でしっかり説明したいと思う資料は、パソコンで打つのではなくて手書きで自分なりの肉筆で気分が伝わればいいなと思ひながら、そんな資料を1ページ、2ページ、3ページとつけさせてもらいました。

また、4ページ目は、これももう10年近く前、8年前の丹波新聞の記事なんですけどね、私も実は十四、五年前、小学校と中学校のPTAの副会長、会長をそれぞれ何か4年ほどさせていただいた経験がありましてね、そのことから自尊感情についてもちょっと思い当たるところがありますので、また後でお話をさせてもらいたい。

5ページ目は、やはり郷土の誇るべき先輩方、一応これ安藤広太郎、芦田均、そして今度、柳田敏雄さん、この3人ほど挙げております。

6 ページは、私、「広報たんば」で毎月私のコーナー、半ページですけどもいただいております、私なりに渾身の力を込めて毎月書いております。1月号と5月号のことをちょっと書かせてもらいました。

次、7 ページは、新規採用職員に対して3つの教えではありませんが、こういうことに気をつけてこれから仕事に臨んでほしいというようなことをちょっと書きました。こういったことを御説明させていただきたいと思っています。

1つ、まず一番最初に、12月4日、これは就任の前日ですけども、辻市長との間で引き継ぎ式がありました。あまり長い時間ではありませんでしたが、辻さんから言われたこと、2つ大きなことを覚えております。それはね、1つは、自分は計画づくり、総合計画を初めいろんな計画はつくってきたけども、それをこれからはあなたには実現してほしい、見える化してほしい、そういうことを託されたのが1つ。やっぱり旧6町、丹（まごころ）の合併、そういうことを組織もつくって頑張ってきたけども、なかなか道半ばだったと、それを何とか実現してほしい、この2つを大きな課題として託されたと思っています。

その次のページをめくっていただくと、私の友達に説明するために私、これつくったんですけどね、果たして何でこの選挙に私一体出たんやろうと。はっきり言って、私、選挙のとき63でしたけど、今、64です、この年になってね、もう明らかにこれから人口減少していく、こういう地方自治体のトップに立つことのしんどさ、これは誰が考えたって、おまえ何を考えとんねやと言う友達もありましたのでね、そこのところを自分なりに人に説明できるような、説明できない部分もありますけどね、そういったものを図示したものがこれなんです。

結局ね、2番目のところに終始するかなと私は思うんですよ。しんどいことはわかってたんですけどね、急に暇になるのが嫌やった、そういう気持ちが多分どこかにあったと思います。ぱっと手帳見た途端に、あしたからスケジュール表は何も書くのがないような、そんな人生を送るのはやめとこかと。しんどいのはわかっとなねんけども、自分がやっぱり何か楽しめる、かつそれが地域のためになるんやったらこんなおもしろいことはないん違うのとい

うことから清水の舞台から飛びおりたということでございます。

市長のカタチと書きましたけど、これはね、豊岡市の中貝さんという市長さんがおります、私より2つ年下なんですけども、私は彼のことをすごく尊敬しております。彼が最近よく言ってるのは、やっぱりリーダーというのは率いるだけではあかんと、やっぱり心寄り添うそういう局面が、そういう姿勢が絶対に必要、それは当然ですよ、当然なんですけども、今さらながらに気がついた。

それからやっぱり洞察力、これから5年先、10年先、20年先どうなっていくんやろう、その場合にどういう手を打っていかなあかんねやろうと、今現在ね、というようなことを考えるのがやっぱり必要かなと思っています。その際にキーワードは交流、私が今度シティ・プロモーションをやろうとしてる、漢字2文字で言えと言われたら交流かなと、ありきたりの言葉ですけどね、そのように思っています。

それで、この7番目のシティ・プロモーションに行き着いたわけです。ただ、これやろうとしますと、教育委員会もそうですけど、今までのルーチンワークに加えて新しい仕事がどんと乗ってきますので、相当しんどくなるはずですよ。かつ、職員数もふやすというわけにはいきませんのでね、これから減らしていく一方、その中で、8番目のワーク・ライフ・バランス、働き方改革というのは国の課題にもなってますが、こういうことも十分考えていかなければならないということです。

私がこれから自分自身を叱咤激励しながら1つの座右の銘としていきたいのは、下に書いたように、「希望に起き、歓喜に働き、感謝に眠る！！」、これはね、大もとは何か中国の言葉から出てくるらしいですけども、直近ではことしの2月、参議院でね、山本太郎さんの質問で、人生で2番目に大切なものは何ですかって麻生財務大臣に聞いたときに、麻生さんがこれを答えた。

希望に起き、歓喜に働き、感謝に眠る、僕はこの言葉は10年前から知ってたんですけどね、これは郷土史家と言われる松井拳堂、松井拳堂は93か94で亡くなってますけど、常に何か書いてくれと言われたらずっとこれを書いてたそうです。かつ、亡くなる2時間前にも、何か書いてくれと言われてこれ

を書いた。その筆跡を私、そのままコピー持ってますけどね、まさに松井拳堂の言葉を麻生さんが言ったということに私は大変に感動したので、ここにちょっと書いたわけでございます。

ちょっと前置きが長くなってしまいましたね。

次のページに行きますと、私、この与えられた4年間、どのようにして自分自身全力で力を発揮していこうか、ある程度ロードマップを書いておかないと皆さん方には理解していただけないということで、テーマは、やっぱり「見える化、スピード感、実行力！！」、一番上に書きましたけどね、これを信条にしてこの4年間何とか走っていきたくと、こういうことです。

そこで1つの照準を当てたのは2019年、花も実もある2019年（丹波市元年）というふうに書きましたけども、2019年は丹波市が合併してからちょうど15年の節目になります。また、丹波市の豪雨災害から5年目、ことしで3年目なんですけど、2019年は5年目になります。また、東京オリンピック、2020年、これの1年前でね、日本全体がすごくいろいろ盛り上がってる、そのまさに途上だと思っています。

ただ、言わんとしている2020年というのは絶対何かあるでと、東京オリンピックだけではなくてね、政府も絶対何か考えてるはずやと思えば、2020年には安倍さんがやっぱり憲法改正、この年に照準を当ててということになりましたよね、それは直接は関係ありませんが、とにかく県立柏原病院と柏原日赤、あれが合併して、200億円を優に超える、そんな大プロジェクトが完成して、病院がオープンするのが2019年の夏ないし秋なんです。

ですから、これが何よりも私は大きなインパクトだと思ひまして、この年に照準を当てて、今まで課題であったいろんな計画だけできてたけど、いつまでにやるというのがけりがついてなかったものを、締め切り期限の効果ではありませんが、このときまでにやるなということで議会にも話をしましたし、職員の間にもこれでいこうやと、血判状を皆さんに、幹部には押しでもろた上で合意がとれたペーパーであります。ですから、このポンチ絵みたいなものが私のこの4年間の進むべき道と考えております。

少しだけ個々に内容を話させてもらいますと、病院に加えて柏原支所、木の根橋のあるね、昭和11年に建った大変由緒のある建物ですけど、あれをあ

のまま支所に使っておるのはあまりにももったいなさ過ぎると前からずっと
思ってましてね、篠山で言うと大正ロマン館みたいなものがありますよね、
あるいは黒豆の館とかね、ああいったような、あれよりもう少し進んだよう
な、そんな施設にしていきたいと思ってます。

定住促進ワンストップ窓口、ここで話をすれば丹波市内の移住・定住の話
が全部できる、小民家を改修してこんなところにも住めるでというような情報
なんかもくれる、あるいはその下に市民活動プラザ、男女共同参画センター
と書きましたが、こういったような、老いも若きも男も女もここで、丹波で
生き生きと自分なりの生活が送っていける、活動ができる、あるいは起業も
できるというふうな、そんな拠点をつくりたい。

あるいは、たんば農の学校、これ、きょうでしたかね、何かテレビに出る、
NHKで6時半から出ますので、丹波を目指して就農したいという若い人が
結構ふえています、これ事実です、そういった人を受け入れて、きちんとし
た師匠のもとにつないでいく、地に足のついた農業ができる人を育てていく、
そんな学校をつくろうとしています。

それから丹波竜、これもフィールドミュージアム構想では大変壮大なもの
で、全部完成するまでには10年、20年かかる事業だと思いますが、何とか
2019年までには一定の目鼻をつけるようなことができないかと考えています。

また、認定こども園、現在9園ですけども、来年、氷上町、そして再来年、
2019年には柏原の2園で合計13園、これが全て一応耳をそろえてといいます
かね、一応完成する。

それから、これ、後でまた教育長のほうからもコメントあるかもしれませんが、
教育委員会の施設であります水分れ資料館のリニューアル、私は昔か
らね、水分れ資料館っておもしろいところやなど。実は、氷上回廊という言葉
を聞いたのは今から15年ぐらい前ですかね、あるとこで本見てて、あ、こん
なおもしろいことがあるんやと、あれの魅力にある意味ちょっと取りつかれ
たといいますかね、感動を受けまして、病院ができるすぐ近くに、まさに生
郷という、そういう地域の資料館なんですけど、ぜひとも、できて30年になり
ますので、陳腐化してますので、リニューアルしていきたいなと思います。

まごころの合併という点では、丹波市の歌とありますけど、これ、ソプラ

ノ歌手の足立さつきさん、春日町出身です、この方と今、相談をしております、ぜひとも来年の秋には完成をさせたい。というのが、今、夢を語ろうとしておりますし、それぞれの部局にこのタイミングでスケジュール表をきちんとつくってほしい。現にそれは今、できつつあります。これがね、仮に全部きちんと出そろいまして、それなりにきちんとした運営体制もできると、多分町の形はかなり変わっていくのではないかと。あるいは、丹波市民の表情といいますかね、活躍、活動、そういったものも変わっていくのではないかと思ったわけです。

その結果として、トリプル3というところに掲げてますが、例えば観光客が3割以上増加してほしい、あるいは婚姻件数、企業誘致も進んでほしいというところがございます。

それを2019年にやるために、この左の、「シティ・プロモーション始動！！」と書きましたが、これが私の最大の政策目標でございます、これはほとんど全部局にわたります。一言で言うと、単に大阪駅や東京で観光キャンペーンをやりますとかいうことではなくて、丹波市民全体のムーブメントという、そういう底力を前提にしましてね、地域を大きく変えていこうという、そんな動きに発展していったらいいなという思いでございます。

その次をちょっとめくっていただきますと、実は、この前、日曜日の日に、シティ・プロモーションというのをどのように、多分文章で書いてもわかりにくいので、ちょっとポンチ絵風に書いてみようと思ったのがこれでございます。中心に大きく書いてますが、やっぱり丹波市民の自信とか内発力とか、あるいはモチベーションを上げていこうとか、そういうことを目指すのが一番の目的なんですが、基本的には市民総参加の推進協議会というのを今度5月の終わり、5月25日に立ち上げることにいたしております。

ここで基本的には全てのことを決めていくんですが、手法としては大きく分けて2つあると思ってまして、空中戦と地上戦と書きました。

この空中戦というのは、この前も新聞記事にさせていただいたばかりであります、いわゆる全国公募でアッと驚く斬新な提案、それを出してください。これはちょっと何のこっちゃわけがわからんなど、民間企業丸投げ違うんかという御批判も実はいただいておりますが、丹波市というところに注目を

してもらって、例えばドローンを使ってこんなことやろうとか、あるいは人工知能でとかという斬新な提案、それを丹波の地で、丹波を舞台にして何か展開してくださいと、その提案を今、待っているところでございます。

異能集団と書きましたけどね、実は5月9日から1カ月間、6月9日締め切りで今、出してもらおうべく、先日、5月11、12と東京と大阪で現地説明会をまずやりました。実は数件、両方合わせて、提案だけの数で言いますと十数件出てきています。ただ、中身は玉石混交でね、これはちょっと無理やなと思うもんから、これ何となくいけそうやなと思うもんまでいろいろあります。またあしたも、具体的に市役所のほうに、こんなんでないやろうというて相談に来られる件もありまして、希望としては、提案としては20件ぐらい出てほしいなど。

そんな中で審査をします。審査をしていって、決まった方と、単純にあんたにお任せでどんと渡すんじゃなくて、必ず市役所のほうと、担当部局とセットになって、その事業を遂行していくべくプロジェクトチームを組んでやっていくというような、そんな流れになります。ですから中身は、提案次第でどんなものが出てくるかは今後のお楽しみ、6月10日以降に、しかるべきときに公表させていただくということになります。

それと、空中戦の右側に異色の広域連系と書きましたけども、やっぱりこの人口減少社会の中でにぎわいをできるだけ維持しようとしたらどうしたらいいのか、今のままではどんどん限界集落がふえるばかりでにぎわいがなくなっていく。そのためには、やっぱり全国いろんなところとアンテナを張って、実は連携を深めていきたいということなんです。

一番のよい例が、これよく記事にさせていただきました恐竜、恐竜は福井県がこれ誰も認める第一級品です、あそこはね。数百億円、福井県が力を入れて取り組んでまして、USJみたいなもんですけどね。そうじゃなくて、丹波竜レベルで言いますと、北海道のむかわ町、全身骨格が出たというて大変有名になり、NHKでも何回も取り上げられました。熊本県に御船町というところがありましてね、ここも地震の被災地なんですけど、恐竜の博物館を持っています。

私、年明け、1月27日の日に、これ、ひょっとして、新規事業を提案する

けども、何か恐竜関係がちょっと寂しいなど、1月15日に「ダーウィンが来た！」でかなり有名になった割にはちょっとしょぼいなということで、苦し紛れだったんですけど、両町長さんに直接電話をしまして、三竜連合というのをつくりませんかという話をしました。

三竜というのは、福井県に比べたら三流という、ちょっと自虐的な言葉もありましたけど、北海道、丹波、九州の3つの竜の三竜なんですけどもね、そうしたところ、両町長さんとも二つ返事で、やりましょうと。ちょうど丹波が真ん中やから丹波に集まりましょうということになりまして、実は5月23日に丹波にお越しをいただきます。

ですから、この近くの恐竜の郷、せっかくオープンしましたので、あそこも、あるいはここのちーたんの館なんかも見ていただきながら、今後の展開について相談しようということで、今、我々なりに原案をつくっているところです。できるだけスピード感を持って、調印をするタイミングですとかね、具体的に地元のいろんな経済交流に最終的にはつながるようなことになったら一番ありがたいと思うんですが、そういう相談をすることになっています。

あと、宇宙桜といいまして、これ、ちょっと話をすると長くなるので割愛させていただきますが、私、前、淡路夢舞台というところに勤務いたしておりまして、そこと高知県仁淀川町、桜の苗を送るプロジェクトがありまして、それにもちょっと参加をしよう。副市長にも先日ちょっと行ってもらったところです。

あと、薬草の関係では、奈良と書きましたけど、今、宇陀市というところがあります。昭和56年に柏原町が大宇陀町と姉妹提携を結んでおりました。それは織田信長の末裔が宇陀藩から柏原藩にお国替えになった、300年、400年前の話ですけどね、それをきっかけにしていたんですが、合併した後、公式には音沙汰がなくなっていたんですよ、それを何とか復活させよう。

というのは、この宇陀市というところは推古天皇の時代から薬草をつくってまして、沢井製薬とかロート製薬とか津村順天堂とかアストラゼネカとか、とにかくね、名立たる薬品会社の創始者がそこから出てるんですよ。要するに薬刈り、昔の薬というのは、要するに薬草からとりますのでね、奈良の都の近くでそういうことをやってたもので、薬草博物館を持っています。山南

町も薬草薬樹公園と、それから恐竜、この2つがやっぱり売りだと私は思っているんですが、そういうことがあってここと連携しようと、そんな話をしています。

あるいは、包括連携と書きましたが、具体的な企業の名前はちょっとまだ差し控えさせてもらいますが、近日中にその企業と我々との間で包括連携協定、あるいは大学、これも具体的に今、話を進めようとしております。この二、三日うちには具体的な協議を進めるんですが、そういったいろんな分野で連携を図っていきたいと思っています。

実は、このほかにもまだ待機してるものがたくさんありましてね、5件、6件ぐらいあります。そういうふうにご気を付けておれば何ぼでもそういう交流ネタって出てくるもので、そういった部分がいわゆる空中戦という部分になるわけです。

その下のほうの地上戦という部分では、6個の真珠のネックレスと書きましたが、辻市長も、なかなか6つの、旧6町の気持ちが1つにならん、これには本当に苦労したとおっしゃってましたが、別にばらばらでもいいと思います。どこを切っても同じ、いわゆる金太郎あめではなくて、それぞれの特色をいろいろ持ってますのでね、それをさらに研磨して、それを情報発信していくためのそういったものを、例えば自治会、自治協議会、そういったところを中心にこのプロジェクトを何とか進めてほしいなど。

その中には黒井城、きょうも何かちょっとお話がありましたけど、実は、今、3市で連携しようという話があります。というのは、福知山市と、それから丹波市と朝来市、これは先ほどお渡ししたこの中で、「北近畿」の中で、住みたい町ランキングの金・銀・銅メダルってあるんです、この3つの市が一緒になって、この北近畿の成長のエンジンになろうではないか、こういう話を仕掛けようとしております。

現に、地方創生の交付金、これが当たりました。先日発表がありましてね、ですから、その動きがさらにこれから加速をされていくというふうに思うんですが、それぞれお城を持っていますよね、例えばね、福知山城もあれば、当然竹田城、黒井城、こういったところが連携をしてやっていくということもありますし、福知山には何せ公立大学がありますのでね、研究機関がありま

す。朝来は観光とか子育てとかという点では一歩やっぱりぬきんでています。

さらに、丹波市のほうでは移住・定住促進ということは、いわゆる得手やと思ってるんですが、3市が連携して、それぞれの自分の得手の分野をさらに連携をしていくために北近畿を引っ張っていこうという、例えばそういうふうな動きもしていくつもりなんです。ちょっとそれは異色の広域連系の部分のことを言うてしまいましたけどね、6個の真珠のネックレス部分は、各地域の、ごめんなさい、ちょっと前後したかな、ここに書いてるようなことをさらにいろいろ磨きをかけましてね、やっていきたいということ。

それから市民グループによる冠イベント群、こういうふうに書きました。当然、市民の方々、特に愛宕祭、私はこれ大変すばらしいなと思うんですが、今聞いてみると、どうも廃れそうやと、跡継ぎの人がなくて、あれを廃れさせるのはもったいないでと。だから、さらにこれをシティ・プロモーションとか何か冠をつけましてね、若干の助成なんかもしながら、補助なんかもしながらやっていきたいと。

コーラス丹波市の歌、これもこの時期には丹波市の歌が、多分すばらしい歌ができますので、そういったものを歌うグループ、そういったものがこれをきっかけに大きく設立をされて、今後もずっと続いていくようなね、そんな市民の活動のきっかけになったらいいなということです。

そんなことで、2019年にはこういう施設群がオープンするんですが、同時に、ワクワクドキドキキャンペーンと、こういうふうに書きましたけども、そういったものが一挙に花開くような、それがかつ2020年以降もずっと継続していくような、そんなまちづくりになったらうれしいなと思っているわけです。ちょっと茫漠とした話かもしれませんが、それが私が大風呂敷を広げましたシティ・プロモーションというものでございます。

1 ページ目に大風呂敷、「私という人間を信じていただけること」と書きましたが、大風呂敷広げましてもね、私、これ、そもそも人間を信じていただけないと、こんなもんやっても誰もついてきてくれないと思いますので、最近結構、週に2回ほどはいろんな自治会とか、あるいはJ Cさんとか商工会とかいろんなところから声かけいただいて、あんた一体何をやりたいんやと、どんなことをしようと言うとんねん、シティ・プロモーションってもう

一つ何のこっちゃようわからへんがなというところには、こういうふうな手紙の紙を持って行ってちょっと説明をさせていただいてる、こんな状況でございます。

2番の②にバックキャスト法、こんなふうに書きましたけど、丹波市内でもどっか小学校で具体的にこんなことを教えてるんやということを聞いたことがあります、要は、この町をどうしたいのかというときに、5年先、10年先にあるべき姿の絵を描いて、それに近づくためには、じゃあ今は何をせなあかんか、3年後は何、5年後何をせなあかん、そして10年、こんな日を迎える、そういう絵を描きながらいろいろ議論をしていく、それを島根県の海士町という有名どころありますよね、あそこなんかでよくやっているそうでありまして、そんなことも丹波市内の学校でも授業の中で紹介がされてるといようなことも聞きました。

それ、キーワードは2番の④に書きましたけども、市民総参加、市民の人が、何かこれ、いわゆる官製のといいますか、役所が勝手にやってるだけやというふうに思われてしまうとこれはなかなか進まない、それぞれにかかわってもら、いわゆる市民のかかわりしろがどれぐらいあるかというのが正否を分ける基準やと私は思っております。これが私のシティ・プロモーションでございます。

資料の4ページ目につけましたのはね、よく丹波市の子供ってどうなんやという中で、よく石川県議が言われるのは、県議会を訪問したときに、都会の子供なんかはみんなわっと元気に走ってきてね、議長席一遍座りたい、議長席に座りたいって言って席を取り合うような子がおると。せやけども、丹波の子はそんなこと一切せえへんと。行儀がよい、いわゆるおとなし過ぎるということを石川議員が言われるわけです。引っ込み思案とここはちょっと書きましたけどね、そんなことがやっぱり青垣の小学校4校を1つにしたという大きな要因かもしれないんですが。

それから、ここの2009年の丹波新聞を私、大事に持ってたんですが、私もPTAをやってますときにね、当時、私、神戸にいたんですが、西区で夜間パトロールをずっとやってましたらね、シンナー少年が当時いっぱいいたんです。その子らを捕まえて警察に通報するというのが私の仕事だったんです

よ。彼らを捕まえたときに、こっちにらんでどない言うたかという、自分ら何もあんに迷惑かけたかと、かけてないやろうと、せやのに何で僕らをこんなに追い回すんやと言うたわけです。

確かにね、言われたらそのとおりなんですけども、いわゆるセルフエスティームという言葉、後でこれは先生に教えてもらったんですが、いわゆる自尊心が極めてなくなってるんやなど、そのことを強く思いましたので、当然、今、教育の中でもこういうことは考えられてるんだと思いますが、PTAのときにはこのことを大変意識した、そんな覚えがあります。

その次に、ふるさと教育ということも大変重要視されるんですけども、5ページ目にちょっと3名ほど紹介をさせていただきました。なかなかね、安藤広太郎のことを知ってる人って結構最近少ないんじゃないかと思います。柏原で生まれてはるんです。また、文化勲章ももらっておられるんですよ。柏原町古市場というところ、三友楼の隣に銅像まで立ってるんですけどね、あまり知られてないのが残念やなと思っています。この人はお米の研究をした人で、この人のおかげで冷害に悩む東北地方でもね、きちんとそんなときでもお米がとれるようになったという、せやから文化勲章当たったんですよ。こんな人がいた。

芦田均さんは、今さらもう言うまでもないかもしれませんが、京都府の出身、福知山の中六人部の人だったんですが、旧制柏原中学校を出られたので、兵庫県からは総理大臣出てへんって言われんねんけど、いやいや、柏原から出たんやでと、私はいつも胸を張って言うんですけどね、郷土の誇りです。この人が、ここにも読んだら書いてありますが、あと何十年かすると必ず日本再軍備の話が出てくるけども、それは絶対に許したらあかんと、ここに書いておられます。あまりこれは安倍総理の前で言うたらあきませんけどね、こういうふうな信念を持った方がおられた。

この下のね、その左側の、生物物理学者の柳田敏雄さんいうて皆さん御存じでしょうか。いや、僕もね、5年ほど前は知らなかった。僕、前は淡路夢舞台というところ、国際会議場とかウエスティンホテルとかやっているとところですけどね、あそこの国際会議で柳田先生には再々使ってもらいました。そこで、柳田先生も実は柏原高校出身やったということに気がついたんですね。

この先生も実はノーベル賞候補の1人だそうです。文化勲章にも多分その前に手が届くかもしれないと言われてる方です。

実は、ことし柏原高校はできて120年目、いわゆる60年の2倍で大還暦と言うそうであります。1つの大きな節目の年になっています。還暦の60年のとき、昭和32年、そのときは、記念講演は誰がされたかという、芦田均さんがしはったらしい、元総理大臣のね、亡くなる3年ほど前にされた。ことしの大還暦のときは誰がしはるんやろうと思って聞いたら、もう言うてもええというから言うんやけど、この柳田敏雄先生がしはるらしいです。この人の話は非常におもしろいです、1回聞きましたけどね、脳の話ですからね、右脳と左脳の話はおもしろかったです。中に脳梁というて右脳と左脳を結んでるやつをぷつんと切ると人間どないなると思うとかね、そんなおもしろい話、そんな話をまたしていただけるのではないかと思っております。

また、私、一番表紙に、地域の誇りと一番下に書きました。地域に誇りを持つためのそういう教育をいろいろされると思うんですけど、やはり単に知ることだけではなくて、それを行動に起こす、そういう必要がやっぱりあるやろうなと思います。

丹波の森公苑でOB大学というのがありまして、かなり高齢の方、70、80の方がいろいろ勉強されるんですよ。ことしも入学式があって、私、挨拶の機会がありました。ちょっとこんなこと言うたらいかんかなと思いつつながら、単に時間があるから学ぶだけではなくて、できればそれを行動に起こして地域づくりに役立ててほしいというのは言わなかったかもしれへん、ちょっとそういう意味のことを言うてしまいました。

ここに知行合一というふうに書きましたけど、吉田松陰の床の間には必ずこれがかけてあったそうです。この人は大変にラジカルな人でね、ああいうふうな行動になって、ああいう最期を遂げられたわけですけども、陽明学の教えではありませんが、やっぱりこういうことって今の時代大切やろなと思っております。

僕も但馬県民局で勤務をさせていただきました。そこで驚いたのはね、小学校5年生の子供が身土不二とか、あるいは汽水とかいう言葉を知ってる。身土不二って普通の人知りませんよね。これ、もともとは仏教用語らしいんで

すけど、身というのはすなわち、まあ言うたら医食同源に近い意味かなと思う。すなわち身は健康ですね、自分の健康、それと土、これはまさに野菜を育てる、食物を育てる土、これは2つのことではない、1つやと、セットもんやと、だから、健康なものを、ちゃんとしたものを、農薬の入っていないものを食べないと病気になるという、反対に言うたらね、そういう意味違うかと私は思っていますが、それはまさにそういう環境教育をコウノトリが舞う但馬ではかなりされていて、子供までかなり浸透しています。そのことが子供の誇りになっています。そういうことがちょっと豊岡で勤務して一番心に残ったことでした。

「ようこそ先輩！！」と書きましたが、柏原高校では先輩を呼んでこういう授業をやってますよね、私は2回行きました。柳田敏雄さんと、それから無鹿の鴻谷さんね、行きました。大変によかったです、感動しましたわ、どちらもね。こういう出前授業みたいなものはぜひとも、いろんな先輩の話を知るとい意味ではどんどん、機会があればですけどね、されたらいいなと思いました。

実は、この1月27日に黒井の小学校に来てくれと言われて行きました。これ、子供たちが、5年生ぐらいの子供でしたかね、地域づくりにこんな提案をしたい、それぞれグループごとに研究したものを発表する場に行きましてね、最後、市長さん、どうですかと意見まで求められまして、ちょっともごもごしましたけどね、何とか1つでも実現できたらなと思います。

トライやる・ウィークというの、前の辻市長が教育委員会におられたときに始められた授業というふうに聞いております。こういったものもいろいろもう少し姿を変えて、地域づくりに役立つような、そういう実験的な取り組みができればおもしろいだろうなと思っております。

資料をつけさせてもらいましたが、この6ページのところに、毎月私のコーナー半分ずつあるんですけど、1月号と5月号をつけさせてもらいました。私、いまだにね、小学校のときに一番楽しかった、あんな楽しい時間なかったかなという記憶をここに書いたんです。この前、小学校同窓会がありましたね、これを見せたらみんな覚えてました、このことをね。

それと、下のほうは、今度、恐竜、例えば山南町に行って、保育園の子に、

あんた、将来何になりたいって聞いたら、恐竜博士と答える子が結構多いらしいです。そんなこともあって、こういうこともそういう地域づくりには大切な要素かなと思っております。

それと、最後、7ページにつけましたのは、新規採用職員に、こういう気持ちで皆さん仕事を一緒にやりましょうよという提案をしたものでございます。常に言うてるのは、「健全な出世欲を持って！！」、健全な出世欲を持つということはいつでも必ず最初に言うております。役所の場合はね、あまり偉くなってもならなくても給料ってそないに変わりません。その割には、上になると結構議会对策とかね、あるいは住民対応とかいろんな大変なことがあってしんどいです。給料が上がる以上にしんどい。せやから、もうあまり偉くなりたくないわと、昇任試験なんか受けんとこうという人が結構いる。それはあかんやろうと。そういうことだけはできるだけ避けてくれということで、あえて自分でしんどい仕事だけども、そういう責任を背負い込む姿勢、そういうものを持ちましょうということをやっています。

それと、「仕事は愉しむべし！！」。やっぱりね、つらいばかりだと仕事なんて続かないです。よいアイデアも絶対出てこない。私も結構しんどい仕事もありましたけど、できるだけ自分で楽しみを見つけながら、はっきり言うて、僕、絵描くの嫌いやないんです、絵描いたり、せやからこの1ページ目、2ページ目、3ページ目ってこれ手描きにしましたけども、別に苦痛やなと思いつつ書いたわけではなくて、朝4時ごろいつも起きるんですけど、朝描くんです、これ。結構楽しみながら自分で描いています。そういう意味では、2番目、仕事は愉しむべし、これは自分で実践している、そんな気が自分では今しているところでございます。

最後に、「あなたと一緒に仕事ができてよかった！！」。転勤になって別れるときにこれを言われたら、これはもう最高ですね、誰でもね。だから、そういう職場でありたいなということです。

それと、地方創生というのは、大変に皆さん、どことも叫ばれてましてね、競争のように人の取り合いをしていますが、もうアイデアって本当に出尽くしてますよ、これ以上ええアイデアって出るはずがないわというぐらいにもう、それこそおから状態、すっからかんで汁も出んという、そうなんですけども、

丹波市役所のチームで、総合力で何とかここは勝ち抜いていきたいなと思っております。

それと、最後に一番新しい話題を。一枚物、この丹波という地図を出しましたけども、実は丹波って実際どんなエリアなんやと実際にこの確認したことって少ないでしょう、ほとんどの人はされてないんじゃないかと思います。私もようわからなかったので、春木一夫さんの「謎の丹波路」からこれ引っ張ってきたんですけど、丹波のエリアは実はこういうふうになっています。兵庫丹波というのは、まさに丹波市と篠山だけで、下に人口と面積ウエートを書きましたが、3割もないんですよ、27%とかね、そんな感じ。そんな中で、丹波市がずどんとこの丹波という大変にビッグな名前をひとりで占めてしもた。

実は、昨晚も篠山市長とお話をする機会がありました。篠山はね、もうはっきり言うてでしたわ。合併したのが1999年、20周年記念が2019年、丹波市がターゲット当ててる年ですね、この年に合わせて市の名前をやっぱり変えたいという意見が多いと、丹波篠山市という名前に変えようという動きが大変強いんだと言われました。

かつ、きのうはね、4時半ごろから40分間ぐらい関テレ、8チャンネル、わざわざ大阪から来てね、私にインタビューしてくれました。結局、聞きたいことは、隣の篠山市が名前変えようと言うとると、そのときにあんたはどんな手入れるの、そういう質問ですね、そういう品のない質問でございます。その前の日に篠山にも入ってかなり長くいろいろ取材をしていったようです。

いろいろ周りの状況も固めた上で、実は5月22日、月曜日ですけども、8チャンネルで4時45分から15分間、そのまとめた結果が放映されるそうであります。私の発言も多分、40分間しゃべったけども、一番言われたくないな、とられたくないなと言われるところの10秒間だけぽっととられると思います。そんなことになるんやと思います。言うたら悪いいうとこだけ入れる。40分ぐらいしゃべらされたらね、一言ぐらいつまらんこと言いますよ、それは。ちょっと向こうが喜びそうなことをね、そこだけとるんですわ、ほんまに、都合悪いことに。

ちょっとそんなことで、これから、そういう意味ではね、丹波と篠山がちょっと熱い状態になってるでというようなことでいろんなところで報道されていくので、むしろそれはうれしいかなと、シティ・プロモーションをやる上ではうれしいなと、そういうふうに思っているような状況でございます。

水分れ資料館リニューアルコンセプトというこんな資料がありますけどね、今言いましたように、何とかしてあそこを、柏原病院、新しく丹波医療センターという名前ですけど、2年後にできます。やっぱりそのころに合わせて近くに名所もつくっていきたい、あるいは柏原と生郷をめぐるあたりにハイキングロードでも何かいいのができたらいいなとかいろいろ思ってるわけですが、氷上回廊を拠点の1つにしたいと思います。市議会でも3月にちょっとこんな提案もありましたし、詳細の検討はこれから進んでいくわけですが、地元と一緒にね、こんなことも進めていきたいなと思っております。教育委員会所管の施設でございますので、これもまたいろいろと御意見、御提案をいただければと思っております。

ちょっと時間は長くなりましたけど、以上で私からの説明とさせていただきます。

○村上部長 ありがとうございます。

それでは、次第に基づきまして、4番目の意見交換というところに入らせていただきたいと思います。最初に申し上げたらよかったんですけども、本日の予定は5時までということにさせていただきますので、御協力をよろしくをお願いをしたいと思います。

それでは、意見交換ということで、市長のほうから市政の取り組み、またシティ・プロモーション等の説明をさせていただきました。その中で特にお聞きになったこと、意見交換をしていただけたらと思いますので、どなたからでも結構でございますので、自由に御発言いただけたらと思います。よろしくをお願いいたします。

○中村教育委員 先ほどの市長のお話を聞いておまして、もし私が丹波市民じゃなかったら、このお話を聞いたときに、とてもいいところやなど、ちょっと住んでみたいんじゃないかと思ったんですけど、もし実際、子供を連れて住むとなったら、ここに連絡をしてくださいというような、ちょっと連絡先

が明確にほかの地方のところにあったらすごくいいんじゃないかなと思ったのと。

あと、住むなら、二世帯で丹波市に来たらちょっと特典があるよみたいな、キャンペーンじゃないんですけど、ワクワクドキドキキャンペーンじゃないんですけど、そういうちょっと特典とかあれば、二世帯で、友達同士で来たら友達がみたいなね、ちょっとそういうことも考えていただいたら丹波市に住みやすいんじゃないかなと思いました。

以上です。

○**谷口市長** そうですね。おっしゃるようなね、そういうインセンティブみたいなものをぜひともこれから考えていきたいと思います。

連絡先なんかもね、ホームページなんかにもちょっとわかりやすいような、そういう表示をしたいと思います。

柏原の観光拠点と言いましたけど、やっぱりね、旧6町ごとのいろんなまだ意識が残ってますので、何やあんだ、柏原から出たから柏原のことから先にするんかいなと言う人は現にたくさんおられまして、いまだに私も言われるんですけど、そうではありませんと、あくまで観光拠点という意味では、一応情報発信元としての柏原であって、柏原のことだけを考えるわけではありませんので、そこに来ると全てのことが、情報がわかる、そういうふうな案内ができるような場所にしたいと思っています。その連絡先も当然きちんとどこかでわかるようにね、表示させてもらいます。

○**荻野教育委員** 今、お話をいただいて感動することが多かったんですが、この中で、全国公募、アッと驚く斬新な提案群ということで十数の提案が出ると。この中でシティ・プロモーション、全国の自治体がやっぱり人口減少の中でいろんなアイデア、政策をつくられている中で、全国公募の企業誘致というようなこともかなり前からされてるように思うんですが、定住人口の増加とか、あるいは、最後におっしゃってる丹波回廊の関係から言うと、観光客なんかの増加もそういうところを通して考えていきたいとおっしゃっておられるように思うんですが、市長がここでお生まれになって、そして、お勤めはかなり離れたところでされていて、そして、退職をされて帰ってこられて、Uターンのような形の中で帰ってこられて丹波市を見られて、丹波市

の今後、今、シティ・プロモーションと言われるような中で、本当に大きな課題、どういう施策を持ってやると丹波市は本当に活動的な、活発な市になるんだろうと。

私もこっちにずっとおったわけではないんですが、丹波市の課題って何なのかな、そしたらそれは必ずやっぱり仕事の問題なんかとかなり大きく関連してるなと思うわけです。そんな中で、市長が活気のある市にするために一番、これは絶対にやりたいな、あるいは教育と絡めて、学校にはこんなことをぜひ期待したいなということが何か具体的にあれば、お話しただけならうれしいなと思います。

○谷口市長 難しいですね。私も12月5日に就任してから半年近くたつんですけども、ほんまにね、やっぱり考えることが多くなりました。考えんとあかんなど。朝起きたらいつも不思議とね、私なりにですけども、新しいアイデアがぱっと浮かぶことがありますね、大切なことは、私が大切なことは、せなあかんことはいっぱいあるんですが、問題は、例えばお金も、財源にも限りがありますのでね、それに優先順位をつけること、何から順番に先にしていかなあかんのか順番をつけて、それはいつごろまでにせなあかんのか、その順番とタイミングですね、スケジュール、それを決めることが私に一番大切なことやと思っています。

その中で何が一番大切やねんと、こうなると、いろいろあるんですけど、例えば、私、思い浮かぶのは、もう2年したら病院ができるんですよ。あの病院というのは多分相当なお金をかけてつくるもので、日赤の部分は、はっきり言うと、丹波の市立病院を持ったと同じぐらいのやっぱり負担がかかっていきます。医療と介護の途切れない連携とかいって、今、全国で病床数が減らされていく中で、そういった地域包括ケアシステムという難しい言葉がありますが、その全国的なモデルになるべきやと漠然と思ってまして、それを何とか実現ささんとあかんなど。それが実現できなければ病院も多分、多分ですよ、下手したら崩壊してしまうと誰も人が寄りません、病院がないところはね、経営状況が多分そんなによい病院が続いていくと思われなないのでね、だから、一番はそれかなと。シティ・プロモーションで観光や何や言うてますけどね、何よりも大切なのは、それを、きちんと病院を守ることで

はないかと私は思っています。

その次には、やっぱり定住人口いいましてもね、一足飛びには無理なんでね、皆さんに興味・関心を持ってもらって、一遍は来てもらって、交流人口からその延長線上に定住人口というのは生まれるんやと思いますのでね、そういう意味ではいろんな、私は観光施策みたいなことに力を入れているようになりますが、結局、最終的にはそういうふうに移住・定住、にぎわいが出てきますと、やっぱり自然にその延長線上に職場が生まれてきたりね、いわゆる雇用が生まれたりということになろうかと思っております。

教育という点では、今、丹波市内に3校高校がありますね、その中で柏原高校の子は比較的皆さん出て行って、なかなかもう帰ってこない人が多いんですけども、氷上高校とか西高は結構地元に着される人が多いし、一遍出ていってもまた帰ってこられる人が多い。だから、やっぱりそういうところは大切にしたいなと思っております。ちょっと長くなってもあれなので、大体そんなところ。

○**深田教育長職務代理者** 丹波市総合教育会議という席ですので、教育というものに特化いうかして御質問をしたいんですけども、子供たち、小・中、今、高校の話も出ましたが、それと社会教育の側面では大人たち、先ほどOB大学の話も出ましたが、そういうもろもろの教育という環境の中で、市長は丹波市の課題といたしますか、どういうふうなこととして捉えておられるか、もし思いがありましたらちょっとお聞かせ願えればと思います。

○**谷口市長** いろんな会議で常にずっと言われるのは、特にプロバスクラブなんて言ったらずっと言われますけどね、学力が低い、学力が低いつつとやっぱり言われる。それを何か学力上げのことを、あんた市長になったら考えなあかんねんでみたいなことをもう口々に言われるんでね、いやいや、それどないしたらええんやろうと、もうかなり教育技術的な問題もありますしね、そこはまさにもう教育委員会にお任せせなしゃあないなと思うんですが。

例えば三田あたりは相当学力高いですよ、偏差値にしてもね。皆、高校なんかでも、篠山の人に聞くと、鳳鳴高校に行かないでかえって三田のね、あっちのほうまで行く人が多いと聞きますけども。その学力の問題、それだけ皆さんが口々に言われるねんから、そこをどういうふうにしたらいいのか

というのを相談していくことかなと。保護者の方が一番求めておられるのはむしろそこかもしれないですね、ふるさと教育なんかよりもね。そんな時間あったらもっとこっちにやってえなとかいう話になるかもしれない。だけど、私の立場としては、何とか地域に定着してもらう人、それを1人でもふやしていくためには、豊岡の子供のように郷土に自信を持つこと、持たせること。

豊岡でびっくりしたのは、学校で無農薬栽培の米の話はかなり懇々とするらしいです。特に新田小学校という熱心なところがありましてね、こういうことをしたお蔭で、コウノトリがこのようにして帰ってきて、地球環境が豊岡周辺ではものすごくきれいになりつつあるし、かつ、皆さん体に、健康によいそんな食物を口にすることができるんやって聞いた子供が、家に帰って、お父さん、うちの田んぼに農薬やってへんやろないうて真剣に言うそうであります。それを聞いた途端に、もう農薬やめとこかと思うようになるいうて言うてはりましたけどね。その子が多分18になって一旦どっか都会に出ても、将来、定年後かわからへんけども、多分豊岡に帰ってくるんやろなと思いましたね。せやから、そういうふうなふるさと教育というのはほんまに大切ななと思います。

それプラス、この自尊感情と書きましたけど、その自尊感情を持たせるにはどのようにして子供を育てていったらええんやろうとか、そういうことが非常に大切ではないかなと思っています。自分自身がね、貴重な社会資源なんやと、そんなことを子供に言うても多分わからへんでしょうけどね。自分自身の体傷つけて、それは自分のことやから誰にも迷惑かけてへん、そういう感覚はね、何とかして改めさせる、捨てさせる必要があるなと思いますね。

○**深田教育長職務代理者** ありがとうございます。この会議の事前にも、我々ちょっといろんなところで話をしたんですけれども、丹波市の子供たち、小・中・高、一旦18になると大学とかへ出て行って、また、今の話のように帰ってくる方、帰ってこられない方、いろいろさまざまですが、小学校、中学校、高校、おしなべてすごくよい子たちがこの地域には住んでいる、そういう感覚は強いです。

例えば、挨拶ひとつをとっても、随分と挨拶をする。おはようございます、ただいまという挨拶を地域の方もされるし、そういう雰囲気の中で、おっし

やるように自尊心が割と低いというのが統計でも出てきておるのは確かなんです。それはどこにあるのかがまだまだ私たちも分析はできてないんですけども、今、市長さんに提示いただいたような、夢、ワクワクドキドキ、そういうふうなものをそれぞれの分野の中で吸収していく、子供たちにも伝えていく。

その1つの側面として、また子供たちを叱りもって自尊心を高めていくような側面もあるでしょうし、いろんな組織でも、そういうものを、言動一つ一つを、地域社会が学校へかかわったり、投げかけたりする中でまた自尊心をつくっていけるんじゃないかなと、日々いろんなことを言っ取るんですけども、それはやっていただけるか、やっていただけないか、そこだけの問題でまた高まってくるのかなという思いもあるんです。それをぜひ行政のほうでも、私たちも言うんですが、学校のほうに言っていくようにするんですけど、行政のほうからも、子供たちを見据えた、将来を見据えた何か動きをやっていただければありがたいなということをお話聞いてて思うところです。ちょっと話ごちゃごちゃですが。

○**谷口市長** 予算措置とかいうのはこちらのほうで、市長部局のほうでやりますので、そういった御提案に対しては前向きに取り組みたいと思います。

○**中村教育委員** 自尊心ということちょっと聞いておりましたら、やっぱり親が、声かけなんですけど、もう自分に余裕がないために、もう早くしなさい、何したんか、何したんかって、やっぱり優しい言葉をかけるというのがなかなかできてないんじゃないかなと思います。やっぱり親が、あ、何々ちゃんよかったねとか、きょうは何々した、よかったねというふうにごく褒めるということはとても大事じゃないかなと、そういうふうに関心しました。

以上です。

○**谷口市長** 私もね、ここに書かせてもらいましたけど、6ページのところで、1月号でね、このときってものすごく楽しかったんですよ、これ。何で楽しかったかいうたら、いつもの授業と全然違ったんです。ひび割れた土のかけらで日本地図をつくりかけたんですけども、皆で、ここは、例えば日本一長いのは信濃川やなど、ここに川をつくろかとかね、富士山はこうやからこう

で、関東平野はこの辺やったやろかとかね、この割れ方の形はどうも岩手県に似てるなとかね、そんなことをしてるうちに、もうどんどん日本地図というイメージがずっと頭の中に皆共有できてね、せやから、自発的にそういう地理の勉強をしたという、そんな時間だったんです。だから、勉強の中にもそういう要素を入れることができたらおもしろいやろなと思ったりしましてね。ふだん教えられる授業とは全然違いましてね、そのとき先生はごっつい喜んででしたわ。上野敏夫さんという先生でした。皆さん御存じでしょう。

○深田教育長職務代理者 よい先生です。

○谷口市長 ああ、そうですか。あの先生ね、この間ずっと寝とってでしたわ、昼寝しとって何もせん先生やな思うとったけど、起きてきてね、ごっつい褒めてもらいましてね、おまえらええもんつくったのういうてね、大層私はもう鼻高々やったという、その記憶をここにちょっと書いたんですけどね。

○上田教育委員 自尊感情というキーワードがさっきから出てるんですけど、ちょっと似たような言葉で自己有用感というのも今よく言われてると思います。より自己有用感のほうが、周りとのかかわりの中で自分でも役に立てるとかという気持ちを持てるかということなんですけど、自尊感情も自己有用感も含めて、私は、さっき保護者さんの話も出ましたし、あと、学校の先生もあるんですけど、必ずしもいつも皆さんが余裕がある状態ではないと思うので、学校外とか家庭外でもどれだけの人とかかわれるか、そのかかわりの中で自分が認められてるとか、役に立てるという気持ちを持てることも大事じゃないかなと思っています。

多分学校の先生って、地域、トライやる・ウィークの話もありましたけど、学校の外に出すときに迷惑かけちゃいけないという気持ちも恐らくあると思うんですけど、でも、やっぱり子供の実態は実態なので、そういうところも、完璧じゃないところも含めてみんな育てていくような形になるといいなと思います。

実は私自身も、今は兵教大、教職大学院で学校の現職の先生たちが院生さんなんですけど、ちょっと別の大学で非常勤をしたときに、二十歳の子たちを地域に出す担当のクラスだったんですけど、やっぱりすごくどきどきして、地域の方に迷惑かけないかって、教員側としてはあるんですけど、でも、そ

れも含めて受け入れて一緒に育ててもらえたらうれしいなという、学校とか保護者さんがいっぱいのところをサポートしたり、一緒に動いてもらえるといいのかなと思いました。

ちようどきよう、午前中にトライやる・ウィークの推進協議会もあって、私も出席をしたんですけれども、市長のペーパーで、トライやる・ウィークもちよっと姿を変えて、地域づくりに役立つようなことがあってもいいんじゃないかということだったんですけど、あくまで今の形で言うと、学校の教育プログラムではあるので、子供にとってどういう力をつけられるかとか、どういう育ちがあるかというのが大事だなと思うんですけど、私もやっぱり地域づくりの部分と両立というか、するとおもしろいなと思います。

その場合なんですけど、これは済みません、私の個人的なアイデアというか考え方なんですけど、例えば、やっぱり丹波市としてこれから大事にした産業とか分野があるとしたら、教育委員会とか学校だけじゃなくて市の担当部局、産業とか、農業なら農業の担当部局さんも合わせてそういう受け入れ態勢とか、どういうふうと一緒にやっていけるかというのを一緒にやれば、子供のことだから教育委員会とか学校でやってると、やっぱりそこに限界が出てくるかなと思うので、市としてここは大事にしたいなというのと、子供の育てたい部分というのがうまくすり合わせられれば、体制としても教育委員会と市長部局の担当部署と一緒に力を合わせていってその環境を整えていくということも必要じゃないかなと私は考えています。

○谷口市長 やっぱり私もね、シティ・プロモーションもそうなんですけど、社会参加をしていくのが基本やと思ってまして、それはやっぱり子供のころからそういうふうなしつけといいますかね、そういうことになれさせることというのは本当にやっぱり大切やなと思います。自分自身が子供のころというのは、そういうふうな教育的配慮と言ったらいいのか、そういうものは全くなかったなと思うんでね、ぜひともそういう動きになればいいなと思います。

あと、トライやる・ウィークのことに関して言いますと、私もPTAをやってて、子供に、あんたどこ行ってきたんいうて聞いたらね、いや、もうものすごくよい勉強したところもありますし、僕行ったけど、お店で、そのの

周りの草引きといわって言われたんで、もうずっと朝から晩まで草ばかり引いとって、そんな子もおりましてね、いろいろなんです、ええとこと悪いところのね、せやから、できるだけ心寄り添うようなね、そんなトライやる・ウィークになったらいいなと思います。

今言われた地域づくりに何か関係するようなこと、子供ってね、結構何かもう覚えてないようで、昔のことってやっぱり脳にこびりついてて、それが大人になってからの行動に影響する、ほんまにやっぱりそれは最近思いますわ。せやから、子供が言うた感想って大したことないのであったとしたって、多分心には刻まれてんねやろなと思うので、今おっしゃったような提案を一遍それぞれの部署に聞いてみましてね、おもしろい仕事、はっきり言うて市役所いうたらもう何でも屋さんですから、医療・介護の現場もあれば、農業の現場もあれば、何でもありますので、そういうところで、可能なところで実体験してもらって、中学生のインターンシップみたいなことになってもおもしろいかなとは思いますが。また考えてみたいと思います。具体の提案はまた皆さんに。

○上田教育委員 行政との協力という意味では、市役所内部自体もそうなんですけど、例えば農業の担当の部局があったら、そこが受け入れるとかそれだけじゃなくて、そこが何かその分野でもし受け入れるなら受け入れ態勢を現場とも連携してとか、企業さんとも連携して整えるとか、そういう、やっぱりそこに教育委員会から行くというのとか、学校から直接行くというのはちょっとハードルがあったりするんで、官民と言っていていいですか、合わせての体制づくりという意味でも担当部局さんが動くか動かないかで違う部分もあると思うので、役所だけが必ずしも抱えなくていいかなと思うんですけど。ちょっとそういう意味で申し上げました。

○谷口市長 ありがとうございます。

○深田教育長職務代理者 今、トライやる・ウィークのことが出ていましたが、トライやる・ウィーク、きょうも朝、会議してたんですけども、個人的にはその経験をした後のトライやる・アクションという、自分が経験してきたことを紹介しまして、いろんな地域へボランティアなり、あるいは支援をしていくという、そういう動きを大事にする意味があるんですが、今のお話の

ような形の中で、やっぱり教育でいろいろと学校側、先生側から教えていただくことは自分で消化して次の行動に移るといふ、それをやっぱりいろんな場面で仕掛けていかないのかなという気がします。それを教育委員会なんかでも、事務局も含めて学校現場にいろいろと言うとんですが、なかなかそれがうまく回ってない部分もあるのかと。

それにプラス、先ほどおっしゃいました学力が低いという、この学力はどこを捉まえておっしゃってるかは、それはわからないところではありますが、言われるのは、高校から大学への進学等々ですごく数字的に出ないと、てなことが言われとるわけですが、その辺は市長おっしゃったように教育技術的なところでカバーできる面があるんですが、そこはまたその伝え方でやっていかないといけない。

ですから、何が言いたいかといいますと、子供たちが今、丹波市、市長がいろいろと提言されてること、それを1つの志として頑張っていける、それを教育現場も頑張りを出せるような、そんな環境を我々はつくっていかなくちゃいけないのかなというように、そんな思いがしています。

○**谷口市長** ここにもちょっと書きましたけど、出前授業とかですね、こういったことってやっぱり学校のスケジュールの面から無理なんでしょう。なかなか簡単にはいかないのでしょうか。

○**深田教育長職務代理者** いや、割と現場では、小・中学校ではよくやっております。回数的にそれがいいかどうかうちはわかりませんが、よくやっております。ゲストティーチャーとか、割と地域に限定された狭いところの方が多くて、そこに地域から出て成功された方を呼ぶというのをやっておりますし、なかなかそういう機会に恵まれない学校もあると。やっておりますと思いますので。

○**谷口市長** どうなんですか、やっぱり一定の効果はあるという評価をされてるんですか。

○**深田教育長職務代理者** その評価のはかり方なんですけれども、子供たちはいろいろと大人から聞く話は新鮮には聞いているとは思いますが、ただ、それが残ってるか残ってないかという、あるいは自分がこれから大人の社会へ出ていくときに、それを活用してというようなところで残ってるかどうかというの

は、それは確認できないですけども、新鮮な、聞いてはおると思いますけど。

○谷口市長 難しいです。現実問題としてね、私らは中学校、高校ぐらいのころは、とにかく残るなど、出ていけと、大志を持って都会へ出ていけと言われてた時代でしてね、それは今も一緒だと、言いにくいですけどもね。そうでしょう。そういう中で、私もこれ、できるだけ残ってくれる子供さんをね、若者を育てたいと、こういうふうに自分がしてることと逆のことを言ってる、そういう矛盾を感じながら言うてるんですけどね。残れというんやったら残れるだけの環境整備してくれと、こういうことですよ、本当はね。そこはいつも自己矛盾という感じで、そこに突き当たるところですけどね。

○岸田教育長 今、ちょっといろいろ話を聞いてて思うんですけど、今、教育委員会で、丹波に学び、丹波で育ちと、丹波を担う人づくりということで、できたら子供たちがこれから丹波市を背負って、また発展させてくれることを願ってるわけですけど、毎年、全国学力調査というのがあって、その質問肢の中に気になる項目があって、例えば将来の夢や目標を持っていますかという問い、これがずっと低いんですよ、全国平均に比べると。特に中学校が低い。

もう一つ気になるのが、失敗を恐れなくて挑戦していますかというこの問い、これも低い。ずっと低い。ここはやっぱり志を持って、そのために失敗を恐れずに頑張って、自分でできることをやってほしいなという、そういう教育をやっぱり展開すべきだろうな。

学力の話も出ましたけども、そういう中で、今、市長が言われてるようなふるさとに愛着と誇りを持つという、丹波市教育委員会でもふるさと教育、あるいはふるさと教育をやっているんですけど、やはりこれからというのは子供たちがふるさとを知って、ふるさとの人々と出会い、人とつながり、こういう大人に支えられて私たちは、僕たちは生きてるとい、生活してるとい、感謝や、それから尊敬の念を持ち、それが中学に行くようになって家族への所属感とか社会への所属感を感じながら、じゃあ僕らの中でできること、私の中でできること、何か貢献をしたい、何か挑戦をしたい、そういうようなキャリア形成につながっていく中で、要するに自分らしい生き方を見つけ

たときに自己有用感というのは生まれてきて、その先にあるのが、やはり僕にもできる、私にもできるという夢や目標を持つんだらうと思うんですよ。

だから、そういう、例えばふるさと教育一つ例にとると、子供と大人をつなぐ、子供と社会をつないであげるというような、発達段階においてそういうところからキャリア形成していく中で、何か貢献しようと思えば、やはり自分は知っておかなきゃいけない、当然学ぶ意義というのは出てくるので、させられる勉強から自分から学ぶ勉強へと変わっていく。そうすると、学力というのは、おのずと自分たちで主体的にするだらう。その学んだ力を今度使おうとする。

そういうふうに考えたときに、さっきも上田委員から出てましたけど、今の子供たちにとっては、自尊感情というのは自分に対する自己評価なんですけど、自己有用感というのは人に役立ってるという自分に対する他者の評価になるので、あ、俺、役立ってるなと認められるという発想が大事なので、どちらかというとき自己有用感というのが感じられるもの。

そうすると、シティ・プロモーションというのがこれから形になっていく中で、学校教育はこれからコミュニティースクールとかという方向で行こうと思うんですけど、子供たちがそういう社会のシティ・プロモーションという中で、自分たちが役立つことが今の総合的な学習時間とか何かカリキュラムでうまく埋まっていく、ともに地域の人と何かをやってる、自分でもできた、認められた、こういうような経験を持ちながらまた大学で学び直して、将来的にまた丹波へ戻ってきて、そのころというのは大分時代も変わってるので、例えばICT1個、ネットワークがあれば何でも仕事ができるってなってるかもしれないし、そういうこと。

だから、思うのは、市長部局の取り組みと教育委員会の取り組みというのは、こっちは行政で市民、こっちは子供ですというんじゃないなくて、市長をリーダーとする市の取り組みの中に育つ子供たちが教育を通じて参画するというような、そういうような仕組みが、一足飛びにはできませんけど、でき始めると、やはり先生方も地域に出たり、一緒に何かをつくろうとしたりって、変わるような気がする、漠然としてるんですけど。そういうふうに考えると、今言った学力とか自尊感情、自己有用感というようなものもその中に入って

きて、変わっていくんじゃないかなって僕自身は思うんですけどね。そのあたりまた市長の御意見とかありましたら。

○谷口市長 先ほど言うたようにね、住民がね、そもそも自己矛盾に気がつくのが、やっぱりふるさと教育プラス自分でできるだけ世界に出て行って挑戦せえよという言葉との矛盾ね。なかなか丹波で挑戦する、まだ若い人はね、やっぱりもうちょっと広い舞台で挑戦したいというね、そこのところで、自分で言ってながら何か矛盾があるかなというところがいつも苦しいんですよ。

○岸田教育長 それね、その1点だけ。

この教育振興基本計画をつくるときに、丹波で学び、丹波で育ち、丹波を担う人づくりってテーマを決めるときに話題になったのはそこやったんです。丹波を担うとなると、ここにいなきゃいけないんですかというのが委員の人からたくさん出て、やはりいろんな世界で挑戦していく子供を育みたいと親としては思うし、そうなったときに、いろんな委員の方から出たのが、いなくても外から担えること、協力ができること、あるいは時代がちょっと、時代というか、年がちょっとたってからでももう一回戻ってこようという気にはなったりするし、また、自分の持つてる力でゲストティーチャーで入ることができるし、いろんなかかわり、ただ、出たらもう丹波市のことは知らんよというような教育じゃなかったらいいんじゃないかなという話があったんですけどね。

海士町なんかのように、一旦出て行って、学んだことをもう一回持ち帰ってきて起業すると、あの発想も、これは丹波市でもやっていける、先ほどの繰り返しになりますけど、時代が変わるんで、僕はICTとか英語とかというツールを物にしていけば、ここからでも十分に社会参画することはできるし、いわゆる経済効果も生まれてくるんじゃないかなと思ってるので、ただ、そこへ戻りたいというような魅力のある丹波市なのかどうかということが先やないかなと思うんですよ。だから、ここにおるよりは多くの人ともっと出会ってきてと、ほんでやってきて、もっとたくさん学んできてよと送り出した分、またもう一回帰ってきたいなという、そこで僕は、今、市長言われた、矛盾を自分の中では整合性が保てるんじゃないかなと思うんですが、そこらはどうですか。

○谷口市長 難しいですね。ちょっと一晩考えさせてください。

○荻野教育委員 ことしの施政方針の中にふるさと教育の充実ということになり書かれてありまして、最近、やっぱりふるさと教育については、教育委員会なんかも学校に対して指導する中で、学校の取り組みはかなり変化をしてきてるように思います。

この二、三年前と特に私が感じましたのは、校区の小学校の運動会の中で5・6年生がふるさと教育をやってきたことの集大成を発表したんですね、演技として発表したわけですが、夏休み中にかなりその地域のひと・もの・ことというようなことについて、地域の長老であるとか、よく知ってる人たちにしっかり話を聞いて、やっぱりそれを自分たちのものにして、まとめて、そして先生方と一緒に1つの作品をつくり上げたんですね。これまでの発表とはかなり中身が違って、すばらしいものでした。子供はそのことを通して、ここで生まれたことに対する何か気持ち、思いみたいなものをしっかり持っているように思ったんです、その発表を聞いて。

その取り組みを通して大人がかなり触発をされました。私も関係しておりまして、自治振興会、自治協議会で、子供たちがあれだけの発表をするということは、大人たちが、今、丹波市教委が言ってるような市民総がかりの教育ということから言えば、動かなあかんの違うかと。というのは、具体的に大人たちが動いて子供たちへの支援をするようなことをやっぱり自治振興会として取り組む必要があるんじゃないかという機運はかなり上がってきたんですね。

その学校の取り組みについて言えば、先ほどのふるさと教育と学力の問題は相反するようになって、やっぱり子供たちはもっと違った時間の中でそういうものを学んでると。例えば授業時間に食い込んでやってるということではないので、親にはかなり誤解があるんじゃないかと思いました。子供たちはやっぱりあいてる時間の中でそういう村のことを知ったりということが多くできていってるように思います。

そういう意味で言うと、学校の先生方の取り組みというのはすごく変わってきたなという感じはするので、私は、教育行政等で市の行政から言えば、やっぱり自治協議会とか自治振興会にどうアプローチするかというのも市行

政のほうの1つの取り組みになるんじゃないかなというようには思いました。そういう意味で言うと、やっぱり大人の機運というのは、私は盛り上がってきているようには感じています。

○上田教育委員 先ほどの市長の自己矛盾に戻るんですけど、私が考えることを幾つかお話しすると、まず、教育の目的は、教育基本法によると2つあって、1つは人格の完成で、もう一つが国家とか社会の形成者になるということなので、それは、私なりの解釈で言うと、1点目というのはやっぱり個人、一人一人の幸せとか成長の話で、2点目というのは、やっぱり生かされていて、自分が生きていく社会で役立っていくということだと思うんですけど、そういう意味で言うと、子供たちが地域にかかわるとか、地域を、丹波を知るというのは、1つの子供たちにとっては社会を知る、自分が生き抜かなきゃいけない社会を知るというときの一番近いところはまず地域なので、そういう意味があるのかなと。単に地域を知るというのは、地域に残れという意味だけではなくて、地域とか地域で生きる人と出会うことで自分の生き方を考える1つのツールという言い方がいいかわからないんですけど、なのかなと考えています。

2点目は、海士町の話が出てますけど、おもしろい考え方かなと。海士町にかかわってらっしゃる方が言ってたのは、都会に出て、大企業でも何でもいいんですけど、鍛えられてから戻ってきてほしいって言っていて、何かひよひよのまま残ってもらっても、お荷物とまではいかないですけど、それより1回都会に出て、要は都会で研修機能をもうフルに使って力をつけてから帰ってきてほしいという、別に全員がという意味じゃないと思いますけど、その発想おもしろいなと思って、今までどちらかというところと地方がお金かけて育てた子供たちが都会に離れて行って帰ってこないという構図だったのを、逆に都市が持つてる機能を使って、力のある人にもう一回帰ってきてもらうという発想を持っていて、そういうふうにもおもしろいのかなと思いました。

最後なんですけど、私は一応孫単位に当たるんですけど、今の世代、若い世代は、2点目と関連、力を持ってないと難しいかもしれないですけど、どの地域でもできることに対する可能性というのは、例えば私の世代だったら

親の世代より持ってると思います。都市にいても丹波にいても自分にできることがあるんじゃないかというのは、若い世代のほうがある意味、楽観的に考えてるところも、全員ではないんですけど、あるかなと思います。

ただ、そのためには、何か場所によってはローカルアントレプレナーシップ教育とか言ってるんですけど、地域で自分の力で起業していくとか生活を立てていくという力、そういう発想も必要になってくるのかなということが1つと。

もう一つは、大人側というか地域側の責任としては、やっぱりみんながそうなれるわけじゃないので、働ける場、生き生き暮らせる場という、教育長の言葉で言うと魅力ある地域づくりをしていくという、その両方が合わさると可能性というのは広がっていくのかなと考えてます。

○**谷口市長** 確かに、教育基本法の解説をしていただいて、どっかで言われたときに1つは返せるかなというネタはできました。都会で鍛えて帰ってきてくれという、私みたいにもう60を超えてへろへろになってから帰ってくると言われるのもありますけどね、なかなかね、30代、40代で帰ってくるいうて、ちょっとなかなか難しいですよ、現実的にはね。せやけど、それぐらいの人にほんまは帰ってきてほしいというのが実態かもしれないが。

うちのこのシティ・プロモーションいうのも、せやから、結構丹波にゆかりのある人が今ちょっと相談に来たり、こんな提案したいんやと言うてくれる人がいて、中身を聞いてると、これ、本気でこっちに帰ってやろかと、僕、直接メールしてないんでわからんですけどね、そういう意気込みを感じる人もありますんでね、そういう意味では、このシティ・プロモーションもそういう人を掘り起こすというのかな、そういう効果もあるのかなと思ってるんです。

○**中村教育委員** 子供なんですけど、小・中・高と丹波でずっと育ってて、やっぱりちょっと都会に出たいという思いは強いと思います。そこで、小学校では自然学校があるように、中学校なんかで都会学校というのをつくって、ちょっと都会を見て、数日ちょっと都会の中学校に住んでみてというか、それで丹波市のよさを知るといって、そういうなんもできたらいいんじゃないかなとすごく思います。私の子供なんかは、自然の中で育つとんのに自然学校

ばかりで、ちょっと都会行きたいわとか言うので、ちょっと都会の生活というのもさせてやるといいんじゃないかなと気づきました。

それと、ふるさと教育なんですけど、ちょうどこの氷上回廊分れフィールドミュージアムができるので、それとあわせて子供も委員会みたいなのを立ち上げて、子供たちの力でちょっと考えを、意見を、とてもいい意見を出すと思うので、そこから子供ガイドじゃないですけど、そういうなんをつくったりして、ちょっと子供たちに意見を聞くのもいいんじゃないかなと思いました。

以上です。

○谷口市長 都会学校どうですか、自然学校やなしに。

○中村教育委員 だから、ほんま今の子ね、定期をね、よう通さない、見せないんですよ。

○深田教育長職務代理者 笑い話ですけど、自然学校が始まって、今はやるかどうかわかりませんが、淡路の子たち、電車がいないんですね。ですから、自然学校で神戸、姫路へ出てきて電車に乗る練習をする、それを自然学校の枠の中でやってるというのもありましたので、今のもまんざら悩みではないと思いますが。

今、市長のいろいろな計画の中で、要望なんですけれども、三竜自治体連合、今度何か5月23日集まられるということなんですけど、北海道むかわ町、それから熊本御船町、本当によいところです。私なんかは、むかわ町、この前NHKに出るまで、むかわ町いうたらシシャモの町やとかいうて、それしか知らなかったんですけども、それから、最近、五、六年前ですかね、鶴川高校が甲子園出たとか、それぐらいしか知らなかったんですけど、あんな骨格が出て、大きなクローズアップした町かなというような思いなんですけど、それと宇陀もそうなんですけど、小学生も含めて、こういう違う地域にこういう財産があったり、また生かそうという動きがあるという、これを何か交流の中で、子供たちが交流する中で丹波市も何か考えるという、そういうのも1つの計画の中に、構想の中に入れていただいたらありがたいなと、こう思って聞いておりました。

○谷口市長 私もね、具体的にどんなことをしていくかって考えるときに、真

っ先に浮かんだのは、子供同士の交流がでけへんかいうことですよ。どこに行こうかやけども、やっぱり自治体同士がお互いで結んでるということになると、向こうもそれなりの受け入れ態勢でね、また親近感を持って向こう受け入れてくれますしね、おまけに恐竜で何とか町おこしをしようという全く同じ共通の認識がありますしね、多分おもしろいんじゃないかというふうに思いましてね。

○深田教育長職務代理者 また考えていただけると。

○谷口市長 ええ、そうですね。ほんまにちょっと考えたいと思います。多分向こうもそれ同調してくれるんやったら、相互にね、そんなことが進んだらええと思いますし。

○深田教育長職務代理者 奈良の宇陀なんかも近いですし、きれいな城下町等も残ってますし、産業で古いのも残ってますし。

○谷口市長 行かれたんですか。

○深田教育長職務代理者 はい、1回、2回ですけど。割と柏原と似たような感じのところもあるんじゃないかなと思いますけど。

○上田教育委員 ちょっと話がずれるかもしれないんですけど、市長のこの2ページ、3ページの絵がとてもわかりやすいなと思ったんですけど、今の話を聞いていて思ったのが、何かこういうふうな丹波になっていくときに、市民の一人一人の生活がどう変わるのかなという、何かそういう例示というか、例えば小学生の何君の暮らしはこうなりますとか、高校生の何々さんの暮らしはこうなりますとか、1人で住んでるおばあちゃんの暮らしはこうなりますとかというふうに、そういう一人一人の暮らしの変化を何か例でいいんですけど、結びつくイメージがしやすいのかなと。だから、今の話で言うと、何か小学生はもしかしたら恐竜の交流が、何々市と勉強してますとかになるのかもしれない、そういうのがあるとちょっとおもしろいかなと思いました。

○谷口市長 私、そういうことを考えるの嫌いやないんです。次回の総合教育会議にはそれをお示しできればなと思っております。それはおもしろいですね。とにかくね、私、常にずっと意識してるのは、人に説明するときに、役所同士の中では難しい話もありますけど、中学校2年生と87歳の自分の母親、まだぼけてないんです、これに言うて理解してくれるかどうか、それがわか

らなかったらこれはあかんと、わからん資料はあかんと、それを基本にした
いと思ってましてね、まだこれでもちょっとわかりにくい言葉があったりす
るんですよ。

シティ・プロモーションの資料も今、つくってるんですけども、いろんな
人から、横文字が多過ぎて意味がわからんわと、頭に入ってけえへんって言
われてるようなところがあって、そういう意味では、今、上田委員の御発言
にちょっと私も触発されたもんで、考えてみます。そうでないとね、みんな
聞いてくれない。今度の土曜日にも40人ほど集まって、そこでも話しせえっ
て言われるので、こういった例のもので話をしようと思ってるんですけどね、
今言われたように、自分自身の、じゃあ5年後どうなっていくのって言われ
たときにね、一番切実ですからね。おもしろいですね。ありがとうございます。

○村上部長 ほかにございませんでしょうか。今回はあえてテーマを決めずに
市長の施政方針について御意見いただいたりしておるんですけども。

○谷口市長 何かね、聞くと、28年度、1回もやってないらしいです。絶対年
に何回せなあかんと決まったものではないらしいんですけども、1つの目安
として、私もわかりませんが、年に例えば2回とかね、そんなぐらいの感
じで開催してはどうかと。これ、どっちかいうたら教育委員会というより、
こっちのほうから主体的に言うて開かせてもらおうということやね。今、年度
初めということと、それから、例えば予算要求、これからしていく時期とか
ですね、予算固まってからではまだね、反映もできない。例えば秋ごろとか
ね、9月とか10月とかそんな時期になるのかな、ほんで新年度が始まった時
期とか、それぐらいのタイミングで開かせていただいたらどうかなと思うん
です。いやいや、もうちょっと頻度を高くしたらどうかという御意見がある
か、ちょっとどうかわかりませんが、私としてはそんなことを今思っており
ます。少なくとも開かないというのはちょっとあかんなど。篠山は、何かき
のう聞いたたら、何かもうちょっとやっとなるようなことを言うてあったな。

○村上部長 今のも含めてでも結構です、何かございますか、皆さんのほうか
ら。

○谷口市長 僕、昔からね、教育委員会というのは、戦後間もないころに、要

するに教育委員会制度いうもんができて、要するに政治的な色がついてる、いわゆるここで言うと市長部局は教育委員会のことには立ち入ったらあかんと、いわゆるアンタッチャブルなんやでということはずっと基本的な認識として持ってきたんですけどね、そうではないんやということになってきたわけでしょう。

ただ、私のようなポストにつく人というのは、はっきり言うたら相当我が強い人が多いです、私、全然大したことないんですけどね、そういう人、いわゆるバイアスのかかった人ね、偏向的な考え方を持った人、そういう人が来るとかなりかき回されますよ、けどね、教育委員会の中に入ってくるとね。いや、もう勘弁してえなというふうな、が一っと教育のことについて突っ込んでくる人がいる。

せやけども、いじめ対応であんな悲惨なことになるんやったら、そういうリスクはあるけども、市長部局の介入をやっぱり許さざるを得ないという、そういうことになったわけでしょう、教育委員会だけではどうしようもないという、市が1つになってということになったわけで。私もせやからね、どこまで言うてもええんやろうということがあるんです、学力が低いやないの、しっかりしてえなって、そんなこと言うてもええんやるか、どうかみたいなね。教育の現場がわからんもんは黙っとれという話になるかもしれませんよ。その辺が、この会議の進め方として、発言も含めてどこまで許されるのか、そんなもん遠慮せんとばんばん言うたらええねやがなと、こういうことになるのかね、難しいですね。

○上田教育委員 私、この制度が変わるときにまだ文部科学省にいたので、やっぱり教育関係者からすると、何か攻め込まれてくるような受けとめの制度改正だったんですけど、積極的に考えると、やっぱり当然教育委員会って別に子供の事だけじゃないんですけど、でも、やっぱり例えば子供だとしたら、子供のためにどういう環境を整えられるかというのは、別に教育委員会じゃなくても、ほかの力が必要なときもあるので、口出しだけするところとところがバランスが難しく見えるかもしれないですけど、予算とか協力をしてもらうとか、課題をみんなで共有して、そこに向けてどういうふうにするとか、予算とか人の体制も含めて組み立てていけるかというふうに積極的にこの会議

を捉えてもいいのかなと、教育委員側ですけど考えてます。

○谷口市長 恐縮なんですけど、私も少し偏ったところが一部ありまして、過去に例え話が悪く誤解を招いて新聞沙汰になったことがありましたが、「綸言汗のごとし」と、これは数年前に初めて覚えた言葉ですが、要するに、一遍それなりの責任者の言うた言葉というのは、汗と一緒にもとには戻らない、せやから本当にやっぱり注意して、言葉ひとつ、まあ言うたら揚げ足をとられんように注意せえよという、そういう教えやと思うんですけどね

ただ、様々な考えを持っている首長になる可能性って十分ありますよね。だから、そうなったときに、先ほど上田さんが言われたように、攻め込まれるとかね、かき回されるとかって、そういうこと絶対あると思いますよ。そういうリスクもある制度かなというふうにはちょっと思いました。

○荻野教育委員 丹波市はやっぱり市民総がかりの子育て、教育ということで、当然どの立場にある人もしっかりと、やっぱり子育てってこうすべきや、これがいいんじゃないかという発言は当然私はあっていいと思うんですね。恐らく教育委員会そのものがやっぱりチェック機関だとすれば、意見というのは、当然子育てをしていく上で、子供を育てていく上でいろんな意見がある中で、やっぱり意見というのは習練されていって一定の方向が出ると私は思いますので、やっぱり市民も、私はこう思う、あれもやっぱりこう思うというのをきちっと発言をする中で意見がきちっとまとまる。そして、教育委員会は教育委員としての役割をきちっと果たしていけば、今、市長が危惧されてるようなところには私は行かないのではないかなというのがあります。

○村上部長 ほかによろしいでしょうか。ございませんでしょうか。

○谷口市長 そんなことで、大体年2回みたいなところを一つ、こんな感じでこれから進めさせてもらいましょうか。

○村上部長 はい。

副市長、特にございませんか。

○鬼頭副市長 ないです。

○村上部長 それでは、大体5時になってきております。次第のほうではその他というところもございますけれども、特に何か、このせっかくの機会でご

ございますので、何かございましたらお願いいたします。ないようでございますね。

教育委員会のほうからは何かございませんでしょうか。

○**谷口市長** 1つだけね、今、要するにいじめ事案というのがあって、ある日突然聞かされた日に記者会見の場にも出たりとかいうのがありますよね、ああいうことのリスクマネジメントみたいなことはできてるんですよ。

○**岸田教育長** きょうもそういう話をしてたんですけど、常に学期ごとにアンケートをとったり、それから面談をしたりということで、そういうことがないように早目に見抜く力を、教員の専門性を高めるいうことでやっていますが、本当に今の子供たち、テレビを見ると、ああいうことが起きますので、今、私たちが緊迫してるのは、どこの学校でも起き得ることであるというまず認識に立って子供と対峙していくということで、学校教育課を中心に、また学校でも取り組んでいただいております。重篤な場合とかはすぐに連絡をいただいておりますして、いじめゼロ支援チームがすぐ学校へ行ったりして、学校と連携をしながらしてますので、今のところはそういう機能をきちっと果たしてると思います。本当に最悪の事態が起きないように、気を抜かないように、それは常に心がけていきたいと思っております。

○**谷口市長** そういう兆候があると、何かちょっと我々も情報共有をするだけかですね。わかりました。

○**村上部長** それでは、ないようでございますので、以上をもちまして総合教育会議を終了させていただきたいと思っております。

先ほどございましたように、今回はあえてテーマを決めずに、市長の思いというところをお聞き取りいただいて、意見交換させていただきました。次回からは、必要であれば、先ほども意見出ておりましたけれども、テーマを絞る中で意見交換ができるかと思っておりますので、またよろしくお願ひしたいと思います。

以上をもちまして、総合教育会議のほうを終了させていただきたいと思っております。ありがとうございました。